



「最期まで自分らしく生きるために」

自分らしく生きる。これは、男女共同参画社会が提案する大切なテーマの1つです。そこで今回は、最期まで自分らしく生きる、その選択の1つとしての在り方である、ホスピス・緩和ケア病棟を訪ねてきました。大分ゆふみ病院は、治療困難ながん末期の患者さんが、最期の瞬間まで自分らしい人生を送ることができるよう援助することを目的とした、独立型ホスピスです。院長の藤富豊先生にお話を伺いました。

♥まず、ホスピス・緩和ケア病棟というものについてお話をいただけますか。

ホスピス・緩和ケア病棟は、がん末期の患者さんが入院しているので、何も治療しないというイメージを持たれている方がまだまだ多いのですが、そんなことはありません。苦痛を取る治療は積極的にします。患者さんの治療が中心の一般病院とは違い、患者さんを「ケア」をしていく部分がとても大きいのです。それは、患者さん本人だけではなく、その患者さんを支えるご家族に対しても行われていることなのです。

ですから、当病院で言いますと、病室は全室個室ですし、その他にもご家族が泊まったりくつろいだりするスペースがふんだんに設けられています。病気による苦痛をできるだけ取り除くことで自分らしく生き、そして大切な家族とともに一緒にいられる環境を整えているのです。

「ホスピス」という言葉が、もともと「ホスピタリティ」＝「温かいもてなし」という言葉からきていることから分かるように、「ホスピス・ケア」というのは、患者さんが自分らしい人生を全うすることができるよう援助することなのです。

♥家族とともに最期まで自分らしく暮すことができるように、病院の環境を充実させているのですね。

そうです。家族とともに暮すことを考えますと在宅ケアが望ましいのですが、様々な処置や介護されるご家族のことなどを考慮すると、やはり病院で、ということになる場合が多い。ですから病院の環境の方を、患者さんやそのご家族の居心地の良さに合わせようと努力をしているのです。

当病院にはボランティアの方が来て下さり、患者さんに手作りのお菓子を出してくれたり、時には音楽会を催したりしてくれるんですが、彼等の存在が「社会の風」となり、つつい閉鎖的になりがちな病院内に「日常」を運んでくれるのです。通常の生活に近い環境作りのためには、そういうことも必要だと考えています。

♥自ら希望して入院してくる方は多いのでしょうか。

以前は家族やドクターに薦められて入院してくる方が多かったのですが、最近はメディアに「ホスピス」という言葉が見られ、認知されるようになったためか、ご自分で決められて来る方も多いですね。自分の生きざまとして選ぶ、とでも言うのでしょうか。自分らしく「今」を生きることを望まれている方が入院して来るようになりましたね。もちろん全ての方にとって良いとは言えないでしょうが、選択の1つとしてホスピス・緩和ケア病棟があるということを、より多くの方に知ってもらいたいと思います。



医療法人 明和会 大分ゆふみ病院
〒870-0879 大分市金谷迫313-1
電話 097-548-7272 FAX 097-548-7273
ホームページアドレス <http://www2.ocn.ne.jp/~yufumi>